

異文化体験・交流を目的とした日本事情科目の諸問題
Problems Related to the Subject "Study of Japan"
Aiming at Cross-Cultural Experience and Exchange

岡 益巳

Abstract

A subject "Study of Japan", which aims at cross-cultural experience and exchange, has been offered to intensive Japanese language trainees since the fall of 1992 at Okayama University. The author reviews its history over the past ten years. During this period of time, the number of intensive Japanese language trainees has largely decreased, and students of Japanese studies, Japan-Korea Joint Program students, EPOK and other exchange program students came to be qualified to enroll in it. Furthermore, each session of this subject has been reviewed and changed in response to the results of student evaluations carried out at the end of each semester.

Deciding what types of students should be enrolled in this subject often proves difficult because the number of applicants has been increasing, while the class capacity should be limited to 30. The author has been forced to consider adopting a new policy to permit only undergraduate students to enroll in order to keep the class at an appropriate size. "Study of Japan" had been a dependent subject of the "Intensive Japanese Language Course" for more than ten years, and it used to have only a 3-5% weighting in the IJLC. But, since the number of exchange students requiring a rigid and 100% full mark for this subject has increased, the author has decided to assign three small reports to participants in order to cope with this requirement.

1. 序

本論は、日本事情教育のあり方や目的に関して体系的・理論的に考察を加えるものではなく、筆者が異文化体験・交流型の日本事情科目を実施する過程で直面してきた諸問題を取り上げ、授業実施方法の改善策を提起するものである。体系的・理論的に日本事情教育を論じた先行研究には、日本事情をその歴史的展開を切り口として論じた長谷川（1999）、日本事情教育の立場から日本文化の問題を論じた川上（1999）、新たな観点から日本事情教育を論じた牲川（2000）などがあるが、ここでは敢えて言及しない。

筆者は1999年11月に留学生センターに着任した直後から今日に至るまで異文化体験・交流型の日本事情科目（以下、「日本事情」と略称する）を担当している。「日本事情」は1992年4月の留学生センター設置に伴い、同年度後期に大学院予備教育課程である日本語研修コースの中の一科目として開講された。1990年代には「買い物練習」、「ATMの使い方」といった生活に密着した学習項目を含む授業が毎学期5回から10回、平均6.5回実施されていた（岡山大学留学生センター、2002：24-28）。「日本事情」は学部或いは大学院の正規科目ではなく、

予備教育科目であることから原則「単位」は認定されない。

21世紀に入り、留学生受入れ環境が大きく変化する中で、どのような在籍形態の留学生を受講対象者とすべきかという問題が幾度となく浮上し、数年毎に受講対象者の範囲見直しを迫られてきた。また、当該科目のコーディネーターである筆者が直面する問題に学習項目の設定がある。筆者には限られた予算と時間を有効に利用し、受講生に最大の満足度を与えるような学習項目を設定することが求められており、受講生の満足度評価の低い学習項目の廃止・縮小・修正を行い、新たな学習項目の追加を行ってきた。予算枠については毎期貸し切りバス使用3回、謝金講師招聘1回であり、時間枠については概ね15コマ相当分であり、この制約内で授業計画を立てなければならない。

本論では、過去10年間の開講状況を総括したうえで、「日本事情」の運営に当たって直面する諸問題について検証し、解決策を探る。

2. 過去10年間の「日本事情」開講状況の概要

2.1 在籍形態からみた受講対象者

本章では2000年度から2009年度にかけての10年間の「日本事情」の変遷について簡潔に紹介する。

異文化体験・交流型の「日本事情」は日本語研修コースの中の一科目として、1992年10月に設置された経緯があり、最初の8年間は専ら日本語研修生のみが受講対象者であった。2000年度に日韓共同理工系学部留学生事業が立ち上がり、同年度後期に学部予備教育学生（以下、「日韓予備教育学生」と略称する）の第1期生が入学したのを機に、これを受講対象者に加えた。さらに2001年度には、国費留学生である日本語・日本文化研修留学生（以下、「日研生」と略称する）にも受講を認めた。

2002年度から2003年度にかけて、中国四国地方の国立総合大学6校に相次いで留学生センターが新設され、岡山大学留学生センターの日本語予備教育機関としてのハブ機能が終焉した。その結果、1992年度から2003年度前期までの各期の日本語研修生受入れ平均が15.8人であったものが、2003年度後期から2006年度後期にかけての各期の平均は6.3人に激減し、2007年度前期にはわずか1人にまで落ち込んだ（廣田・岡，2008：145）。2007年度から2009年度にかけての直近3年間でみると、各期当たりの受入れ平均は3.5人に止まる。

他方、1999年度に発足した短期留学推進制度岡山大学版であるEPOK制度により受け入れた交換留学生（以下、EPOK学生と略称する）に対しては⁽¹⁾、同プログラム科目「日本の社会と文化」が開講され、当該科目の中で備前焼体験や広島旅行が実施されていた。日本語研修生の減少に危機感を抱いた筆者は、EPOKプログラム担当教員と協議した結果、2004年度後期に試験的に授業の一部を合同実施し、翌2005年度から「日本事情」をEPOKプログラムとの相乗り科目として開講することで合意した。同時に、部局間交流協定に基づいて受け入れる交換

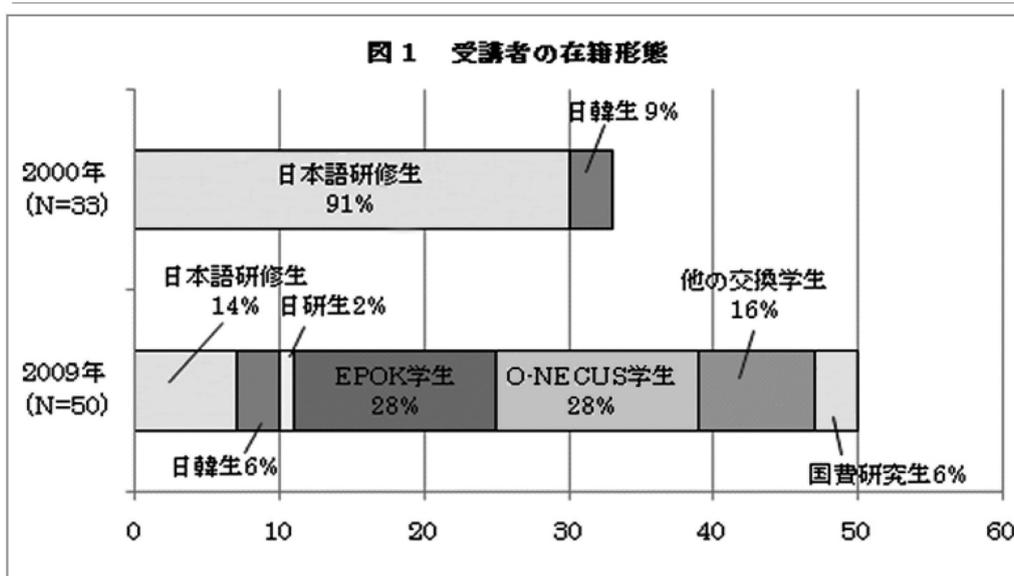
留学生についても EPOK 学生同様に受講を認めることにした。

また、日本語研修コースは日本語研修生の減少を受け、2003 年度後期から 2004 年度にかけてコースの縮小を図ったが⁽²⁾、さらに 2006 年度にはコース維持のために国費及び私費の研究生の参加を認めることを決めた⁽³⁾。このため、同年度から日本語研修コースに参加する研究生に対しても「日本事情」への参加を認めることにした。しかし、私費研究生の無断欠席が相次いだため⁽⁴⁾、2008 年度末を以て当該留学生の受講資格を取り消した。なお、従来日本語研修生にとって必修科目であった「日本事情」は、2006 年度以降選択科目となった。

2008 年度後期に中国東北地区 5 大学と本学との大学間交流協定に基づく交流プログラム (O-NECUS プログラム) がスタートしたことにより⁽⁵⁾、2009 年度後期には予想を遙かに超える数の同プログラムによる学生 (以下、O-NECUS 学生と略称する) が「日本事情」の受講を希望し、同科目の運営に新たな問題を生じている。

論文末尾の資料 1 に示したとおり、2000 年度から 2009 年度にかけての 10 年間では 68 か国・地域出身の留学生 354 人が受講している。受講者 354 人の性別は、男性 214 人、女性 140 人であり、専攻別では文系 141 人、理系 213 人である。在籍形態別でみると、日本語研修生が 175 人で最も多く、次いで交換留学生 104 人、日韓予備教育学生 35 人、日研究生 19 人、日本語研修コース参加私費研究生 11 人、同コース参加国費研究生 10 人の順である (論文末尾の資料 2 参照)。交換留学生の内訳は、EPOK 学生 65 人、O-NECUS 学生 14 人、その他 25 人である。

2005 年度以降の 5 年間でみると、EPOK 学生が 65 人で最も多く、受講者全体の 34.2% を占め、EPOK 学生を含む交換留学生は 54.7% に達し、過半数を占める。日本語研修生の激減を受けて、2000 年度と 2009 年度の受講者の在籍形態には大きな違いが見られる (図 1 参照)。



2.2 学習項目の変遷

半期で概ね90分15コマ相当分の授業を念頭において学習項目を設定し、原則水曜日の午後
に実施している。

授業最終回に受講者による各学習項目別の満足度を5段階評価で実施し、評価の低い項目に
ついては廃止や改善といった措置を講じてきた⁽⁶⁾。すなわち、当初「山陽町訪問」について
は、前期は同町国際交流協議会の企画する特別行事参加と郷土資料館見学を、後期は小中学校
訪問と郷土資料館見学を実施していたが⁽⁷⁾、2005年度から前期後期ともに受講者に最も人気
のある小学校訪問を主とする学習内容に修正し、行事参加と中学校訪問は取りやめにした。

「市内見学」と「三菱自動車工業水島製作所見学」についても2005年度末に廃止し、2006
年度に新規学習項目「広島・宮島旅行」を土曜日に実施することにした。自動車工場見学は興
味深い学習項目であると思われるが、受講者の評価は意外に低い。工場内がきたない、騒音が
ひどくて説明が聞き取れないなどの理由が考えられる。

また当初、日本の伝統文化である茶道と華道の両方を学習項目に組み込んでいたが、華道に
対する男子学生の満足度が低かったため、2006年度に学習内容を縮小して「茶道」のみとした。
この他に、「産業教育フェア参加」、「折り紙教室」、「ニューサイエンス館訪問」、「金刀
比羅宮見学」、「後楽園見学」などを学習項目に加えた学期もあるが、定着するには至らな
かった。

事前学習の一助とすることを目的に、茶道、華道、書道、陶芸、広島市に関するビデオ鑑賞
をオリエンテーション、オプション・セッション、貸し切りバスで移動時の車内などで実施
してみたが⁽⁸⁾、受講者の反応が今ひとつであったため、基本的に2007年度末で中止した。オ
リエンテーションでビデオを見せた場合、学習項目によっては数か月後の実施となることがあ
り、効果が薄れる。別途自由参加の授業を設定しビデオ鑑賞を行った際には参加者が少ない。
移動中の車内の場合、音声聞き取りづらいうえに、隣席の友人とのおしゃべりや居眠りで
ビデオを見ない者がいる。

なお、毎回授業終了時に次回の日程表を配布する。備前焼、茶道、書道などについては、さ
らに授業当日に補助資料を配布する。当初、補助資料も事前配布していたが、授業当日持つて
こない者が複数いるため当日配布に変更した。

3. 「日本事情」が直面する問題点

3.1 履修登録と出席率にかかわる問題

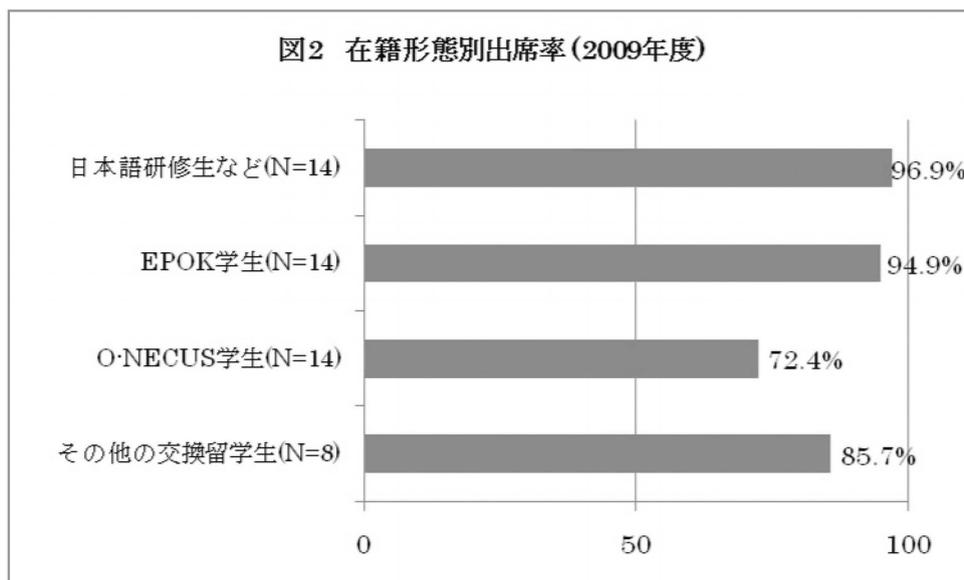
2005年度からEPOK学生を含む交換留学生の履修を認めた。EPOK学生については、コーデ
ィネーターが国際センター（旧留学生センター）教員であり、彼らの科目履修状況全般につい
て把握しており、且つ、筆者とともに「日本事情」の担当者となるため、さほど問題はない。
しかし、部局間交流協定に基づく交換留学生の場合は、研究室活動との兼ね合いがあるため、

履修登録に先立って指導教員の承諾を得る必要がある。この点は、2006年度に履修を認めた、日本語研修コースに参加する国費及び私費の研究生についても同様である。さらに2009年度後期に初めて履修希望者が出た O-NECUS 学生の場合にも同様の問題が存在する。

論文末尾の資料3に示したとおり、当該学生の指導教員に国際課を通じて「日本事情」のシラバスを送付し、研究室所属留学生について受講希望者を募集する。その際に、1) 課外活動であるホームステイを除く7回の授業全てに参加すること、2) 学外に出ることがあるため「学研災」に加入すること、3) 3,000円余りの自己負担をすること、且つ、研究室行事と「日本事情」の時間帯が重なった場合には後者を優先することが受講の条件である旨が明示してある。それにもかかわらず、研究室活動を理由に欠席する研究生が相次いだ。このため、上記の受講条件を再確認させる目的で、2009年度には第1回目の授業で配布する「日本事情登録申込用紙」（日英両語）に氏名・国籍・所属等の記入に加えて、次の4つの項目にチェックさせることにした。

- 1) 私は7回の授業全てに参加できます。
- 2) 私は指導教員の了解を得ました。
- 3) 私は学研災／生協の保険に加入しました。
- 4) 私は参加費として3,210円を負担することを了解しました。

しかし、この再確認作業はほとんど効果がなく、特に2009年度後期は O-NECUS 学生の無断欠席が顕著であった。大学院レベルの交換留学生である O-NECUS 学生の出席率は、それ以外の在籍形態をとる受講者に比べて格段に劣る。2009年度の受講者50人でみると、O-NECUS 学生の出席率が72.4%であるのに対して O-NECUS プログラム以外の学生の出席率は91.9%であり、O-NECUS 学生の欠席率はそれ以外の受講者の3.4倍にも上る⁽⁹⁾。



3.2 成績評価にかかわる問題

「日本事情」は、元々日本語研修コースの一科目として開設されたものであり、単独で成績評価を実施する性質の科目ではなかった。例えば、2000年度の場合、日本語研修コース修了認定に当たって、100点満点中の約3点を占めるに過ぎず⁽¹⁰⁾、この3点は出席率のみで評価された。日韓予備教育コースの修了認定に当たっても出席率で「日本事情」の評価が行われた。1992年度の「日本事情」開設以来、出席率を以て評価してきた理由は、1)予備教育コースの授業であり、単位が認定されないこと、2)コース科目の一つであり、独立した科目としての成績評価が不必要であること、3)異文化体験・交流型の授業であり、参加すること自体に意義があること、の3点にある。

独立した科目として「日本事情」の成績評価を要求するのは、EPOK 学生、その他の交換留学生及び日研生である。EPOK 学生の場合は、EPOK 担当教員で筆者とともに「日本事情」を担当する教員が適宜彼らに小レポートを課し、レポート内容を加味して評価を行ってきた。日研生と部局間交換留学生については、所属部局から成績評価を求められた場合には出席率を以て成績としてきたが、成績評価を必要としないケースも多々ある。

しかし、ここ数年来「日本事情」受講者の在籍形態が多様化しており、2009年度現在で7種類の在籍形態の学生が受講している。他方、日本語研修生にとって必修科目であった「日本事情」は2006年度に選択科目に変更された。2009年度には日本語研修コースの修了認定・成績評価方法が変更され、「日本事情」は同コースの日本語科目から独立して成績を表示することになった。

2009年2月、こうした客観的な情勢の変化に対応すべく、EPOK 担当教員と協議して成績評価方法に関する改善策を講じることにした。異文化体験・交流型の授業であるため、参加することが最も重要であるが、小レポートを3回提出させて成績評価に反映させることに決定した。論文末尾の資料3に示した授業日程を例にとると、次のとおりである。

第1回目：オリエンテーション（出席5点）

第2回目：備前焼体験・閑谷学校見学（出席10点・作品制作5点）

第3回目：広島・宮島旅行（出席15点・小レポート15点）

第4回目：岡山南高校訪問（出席10点・小レポート5点）

第5回目：茶道体験（出席10点）

第6回目：赤磐市訪問（出席10点・小レポート5点）

第7回目：書道（出席5点・色紙作成5点）

小レポートは日本語または英語で作成し、当該授業実施後1週間以内にメールに添付して提出する⁽¹¹⁾。備前焼体験では、コップまたは皿を制作する。作品の上手下手は問わないが、過去にはふざけて恐竜を作った者がいた。こうした場合は作品制作の5点はない。

2009年度を受講者50人でみると、出席率の悪いO-NECUS 学生14人の平均点が65.4点であ

るのに対してそれ以外の学生 36 人の平均点は 92.5 点である。同様に、小レポートの提出率も O-NECUS 学生の 47.6%に対してそれ以外の学生は 93.5%と大きな差がある。

4. 考察

徐々に受講対象者を拡大した結果、2006 年度後期と 2007 年度後期には受講者数が共に 30 人とそれまでの最高になった。「茶道」は留学生会館の和室で実施しているが、参加者が 15 人を超えると 2 グループに分けて実施する必要がある。和室の広さと指導上の見地からすると 1 クラス 12 人以下が望ましい。また、「書道」は書道セット準備数から 30 人が限度であるが、指導上の見地からすると 1 クラス 15 人以下が望ましい。また、貸し切りバスを利用する場合は、引率者が 2 名いるため 43 人が限度である。

2009 年度後期は履修登録締め切り時点で申込者が 41 人となったため、受付終了後に申し込んだ 3 人については受講を認めなかった。数日後に 41 人中 2 人については同一授業時間帯の他の科目との重複履修が判明したため、「日本事情」の履修取消を通知した。39 人中 29 人が EPOK を含む交換留学生である。現在本学では学生交流を盛り込んだ協定が次々に締結されており、今後交換留学生の受講者が確実に増加する。2009 年度後期の茶道は 3 グループに、書道は 2 グループに分けてそれぞれ実施したが、例年に比べて当該授業担当講師の負担増となった事実は否めない。

目下、「日本事情」のクラス定員を 30 人とする方向で検討中である。2009 年度後期の 39 人の受講生のうち、14 人は O-NECUS 学生である。これを除くと 25 人であり、遅れて申し込んだため受講を許可しなかった日研生、EPOK 学生、他の交換留学生各 1 人を含めると 28 人になり、ぎりぎり定員以内の数字に収まる。

ベトナムフェ大学院特別コースの留学生は 2009 年度現在 8 人在籍しているが、同コース独自のフィールドトリップを実施しており⁽¹⁾⁽²⁾、国際センターの「日本事情」は受講していない。仮に同コース学生が「日本事情」の受講を希望すれば、クラス定員を大幅に上回ってしまうことになる。

2009 年度後期現在で O-NECUS 学生は 32 人在籍している。社会文化科学研究科では、修士レベルの学生交換に止まっている同プログラムを博士レベルにまで拡大することが検討されており、近い将来 O-NECUS 学生が益々増加すると推測される。このため、同プログラム運営上必要とあれば、当該プログラム独自に日本事情科目を開設することが強く望まれる。

EPOK を除く交換留学生と日本語研修コースに参加する研究生に対しては、指導教員を通じて「日本事情」受講条件を呈示したうえで履修登録を認めているが（論文末尾の資料 3 参照）、「日本事情」と同じ時間帯に「指導教員との面談がある」、「研究室の行事がある」、「実験がある」といった理由で欠席する者が毎学期後を絶たず、2009 年度後期の場合、6 人がこれらの事例に該当した。備前焼、広島・宮島旅行、書道、茶道などの異文化体験型の学習項目は欠

席者が出てさほど問題はないが、小学校訪問、高校訪問といった交流型の学習項目の場合、小学生や高校生が小グループに分かれ、交流相手である受講者一人ひとりの出身国に関する入念な事前準備を行ったうえで活動に臨むため、欠席者が出ると大きな支障を来す。急病による欠席はやむを得ないが、研究室活動を理由とした欠席は受講条件に反するものであり、大学院に所属する研究生及び交換留学生の履修登録を制限せざるを得ないと考える。

また、2009年度後期の場合、学生による各学習項目の5段階評価の平均値は「広島・宮島旅行」4.83であり、次いで「赤磐市山陽町訪問」4.73、「備前焼体験」及び「茶道」がともに4.41、「書道」4.22、「岡山南高校訪問」4.21の順である。「広島・宮島旅行」は、どの年度においても全ての学習項目の中で受講生の評価が最も高い。しかし、土曜日を実施するため、一つ前の授業で配布する日程表には、「この授業の履修者のみ参加できます。かつてに友人を誘ってはいけません。」と日英両語で明記しているにもかかわらず、履修者ではない留学生がやって来て参加したいと主張し、貸し切りバスの乗車口で押し問答になるケースがこれまで幾度となく発生している。この種のトラブルを回避するためには、全ての授業を水曜日の午後実施するしかない。

5. 結び

「日本事情」は1992年度後期に日本語研修コース科目の一つとして開設されたが、2009年度後期の受講者39人の中で日本語研修生の占める比率はわずかに1割に過ぎず、現段階での「日本事情」はEPOK学生をはじめとする交換留学生への提供科目としての意味合いが大きくなっている。在籍形態別受講者数でみると、この5年間の受講者数が最も多いのはEPOK学生である。EPOKプログラムは開講科目数が少なく、同プログラムの中で「日本事情」は重要な役割を果たしている。故に、「日本事情」は従来の日本語研修コース科目としての位置づけからEPOKプログラム科目へと軸足を移し、EPOK学生のニーズに即した授業内容に改善していくことが望まれる。

他方、O-NECUSプログラムで入学する大学院レベルの交換留学生が受講者数の激増と出席率の低下という新たな問題を招いている。2009年10月29日、大塚愛二・国際センター長と「日本事情」受講資格について協議した結果、来年度以降大学院に所属する学生は受講対象者から除外することで合意した。この合意を受けて、同年11月12日開催の国際センター専任教員会議において、来年度より「日本事情」の受講資格を学部レベルの留学生及び国際センターに所属する留学生のみとすることを提案し、了承された⁽¹³⁾。

さらに、2010年1月に国際センターの改組が通告され、日本語教員には同年4月1日付けで別組織への異動が申し渡された。「日本事情」を含む日本語教育プログラム全般の企画実施主体者である日本語教員団が国際センターを離脱することにより、次年度以降「日本事情」の運営や存続そのものをめぐる問題が浮上してくることが懸念される。

注

- (1) EPOK=Exchange Program Okayama で、大学間交流協定に基づく交換留学制度である。
- (2) 従来は、初級 A クラス・B クラス、中級クラス、上級クラスの 4 クラス編成であった。ただし、上級クラスは教養教育或いは文学部の日本語科目を受講した。2003 年度後期直前に中級クラスの授業が廃止され、2004 年度には初級の 2 クラスが 1 クラスに縮小され、日本語研修コースは実質 1 クラス編成となった。
- (3) 国費及び私費の研究生は、全学日本語コース初級集中クラスに履修登録して日本語研修コースに参加する。例外的に大学院正規生が参加したこともあるが、ここでは便宜上研究生に含める。
- (4) 概ね中国人研究生であるが、自己負担の多い学習項目には参加しない、研究室の行事を優先するなど、出席率が悪かった。
- (5) O-NECUS は、Okayama University - North East China Universities platform, Graduate Student Exchange Program の略称であり、ダブルディグリー制度と短期留学制度を有する大学院レベルの交流協定である。2009 年 10 月現在で、O-NECUS プログラムにより 32 人を受け入れたが、本学から派遣したのは 1 人に過ぎない。なお、中国側の 5 大学は、大連医科大学、東北師範大学、中国医科大学、ハルビン医科大学、吉林大学である。
- (6) 当初 4 年間の学習項目に対する受講生の評価については、岡（2005：84）を参照されたい。
- (7) 2007 年度末までは「郷土資料館」に隣接した「産業会館」も訪問し、山陽町の特産品の試食会を兼ねて同会館職員との交流を行ってきたが、2008 年度に赤磐市の交流予算が打ち切られたことで同会館訪問は中止となった。
- (8) 使用したビデオ教材は NHK インターナショナル制作の英語版『日本の伝統文化⑤茶の湯』、『同④生け花』、『同⑥書道』、『同⑫陶磁器』、『日本の世界文化遺産 4. 合掌造り集落・広島平和記念碑（原爆ドーム）』である。
- (9) インフルエンザ、大学院入試で欠席した 3 人（3 回）は「公欠」であり、除外して計算した。なお、O-NECUS 学生の延べ欠席回数 27 回のうち、授業後の届け出も含めて連絡があったのは 6 回のみで、21 回は無断欠席である。連絡のあった 6 回の欠席理由は、「病気」2 回、「実験」2 回、「友人と旅行」1 回、「授業失念」1 回である。
- (10) 100 点満点中、日本語科目 12～13 コマ 80 点、修了発表 10 点、「日本事情」、「プロジェクトワーク」、「CAI」の 3 科目で 10 点であり、「日本事情」を含む 3 科目については、出席率のみが成績に反映された。その後、科目数や配点に若干の変動があったが、「日本事情」は出席率で評価されてきた。
- (11) 同年度前期は手書きの小レポートを受け付けたが、非常に読みづらいものがあったため、後期は必ずパソコンで作成しメールに添付して提出することとした。広島・宮島旅行は、日本語 1,000 字～2,000 字、英語 500 語～1,000 語とする。岡山南高校訪問と赤磐市訪問は、各

々日本語 150 字～300 字、英語 70 語～150 語程度の短いレポートである。

(12)2009 年 10 月 22 日に岡山大学創立五十周年記念館で開催された「アジア・オセアニア国際シンポジウム」における環境学研究科 Kim Doo Chul 准教授の発表による。同コースは、フェ大学大学院で 1 年半在籍した後、岡山大学大学院自然科学研究科又は環境学研究科の博士前期課程 2 年次に編入学し、1 年間在籍して岡山大学の修士号を取得するものであり、2009 年 4 月に第 1 期生 8 人を本学に受け入れた。

(13)ただし、日本語研修コースに参加する国費研究生の扱いについては、別途考慮することになった。

参考文献

長谷川恒雄（1999）「“日本事情”－その歴史的展開－」『21 世紀の「日本事情」』創刊号、pp.16-26.

廣田陽子・岡益巳（2008）「地域社会における留学生交流支援のあり方－留学生支援ネットワーク・ピーチの交流支援活動を事例として－」『留学生交流・指導研究』Vol.10、pp.135-147.

川上郁雄（1999）「“日本事情”教育における文化の問題」『21 世紀の「日本事情」』創刊号、pp.16-26.

岡益巳（2005）「文化体験・交流型の日本事情教育－実践報告－」『岡山大学留学生センター紀要』第 12 号、pp.75-90.

岡山大学留学生センター（2002）『岡山大学留学生センター設立 10 周年記念号』岡山大学留学生センター

牲川波都季（2000）「剥ぎ取りからはじまる“日本事情”」『21 世紀の「日本事情」』第 2 号、pp.28-39.

資料1 出身国・地域別受講者数 (2000年度～2009年度)

アジア	178	トルコ	9	チリ	2
アラブ首長国連邦	2	ヨルダン	2	ハイチ	1
インド	3	アフリカ	35	パナマ	1
インドネシア	19	エジプト	8	パラグアイ	2
韓国	43	ガーナ	5	ブラジル	7
カンボジア	2	ケニア	4	ベネズエラ	1
シンガポール	2	コンゴ	1	ペルー	3
スリランカ	1	ジンバブエ	1	ボリビア	2
タイ	11	スーダン	6	ホンジュラス	1
台湾	1	セネガル	1	メキシコ	3
中国	35	タンザニア	1	欧州	52
パキスタン	2	チュニジア	2	イギリス	13
パプアニューギニア	1	ナイジェリア	1	オーストリア	1
バングラデシュ	6	南アフリカ	1	ギリシャ	1
フィリピン	21	モーリタニア	1	スペイン	3
ブータン	1	モロッコ	2	セルビア	9
ベトナム	2	リビア	1	ドイツ	13
マレーシア	5	北米	36	フィンランド	1
ミャンマー	16	アメリカ	35	フランス	2
モンゴル	3	カナダ	1	ブルガリア	1
ラオス	2	中南米	29	ペラルーシ	1
オセアニア	11	アルゼンチン	1	ポーランド	5
オーストラリア	11	エルサルバドル	2	ロシア	2
中近東	13	コスタリカ	1	合計	354人
イエメン	1	コロンビア	1	(68か国・地域)	
クウェート	1	ジャマイカ	1		

資料2 年度学期別・在籍形態別受講者数 (2000年度～2009年度)

	日本語 研修生	日韓生	日研生	交換留学生			国費 研究生	私費 研究生	合計
				EPOK	O-NECUS	その他			
00年度前期	13	-	/	/	/	/	/	/	13
後期	17	3	/	/	/	/	/	/	20
01年度前期	15	-	-	/	/	/	/	/	15
後期	17	5	0	/	/	/	/	/	22
02年度前期	12	-	-	/	/	/	/	/	12
後期	20	5	2	/	/	/	/	/	27
03年度前期	17	-	-	/	/	/	/	/	17
後期	8	4	6	/	/	/	/	/	18
04年度前期	7	-	-	/	/	/	/	/	7
後期	8	4	1	/	/	/	/	/	13
05年度前期	7	-	-	2	/	0	/	/	9
後期	4	3	2	8	/	5	/	/	22
06年度前期	5	-	-	2	/	1	1	2	11
後期	5	6	3	12	/	3	0	1	30
07年度前期	1	-	-	6	/	0	1	4	12
後期	6	1	2	10	/	4	4	3	30
08年度前期	2	-	-	0	-	2	0	1	5
後期	4	1	2	11	0	2	1	0	21
09年度前期	3	-	-	7	0	0	1	/	11
後期	4	3	1	7	14	8	2	/	39
合計 (%)	175 (49.4)	35 (9.9)	19 (5.4)	65 (18.4)	14 (4.0)	25 (7.1)	10 (2.8)	11 (3.1)	354 (100.0)

注1) 斜線部分は参加資格が認められなかった期間。ただし、O-NECUSは2008年度スタート。

注2) 「国費研究生」「私費研究生」は日本語研修コースに登録参加した者であり、大学院正規生1人を含む。

資料3 履修登録に当たって指導教員への依頼

2009年10月

国費留学生・交換留学生・協定プログラムによる留学生
指導教員 各位

国際センター
岡 益巳
電) 086-251-7270
email:moka@cc.okayama-u.ac.jp

国際センターで開講の **Study of Japan** (日本事情) の履修登録について

次の3つの条件を満たす場合に履修登録を認めます。

(1) 下記の授業計画のうち、課外活動であるホームステイを除く、1)～7)の全てに参加できること。

(2) 学外へ出ることもあり、保険(「学研災」の年間保険料:文系¥1,290、理系¥1,540)に加入済みであること。「学研災」ではなく、大学生協の「学生総合共済」と「学生賠償責任保険」に加入してもよい。

(3) 参加費として合計3,210円の自己負担をすること。

*研究室の行事と日本事情の時間帯が重なった際に、研究を優先させたいとお考えの場合は、留学生に登録を断念するようご指導願います。

2009年度後期 授業計画表

1) 10月14日(水) 12:40 C24教室集合	オリエンテーション	～14:10
* 2) 10月28日(水) 12:40 体育館前集合	備前焼体験 ¥1,500 閑谷学校入場料 ¥300 合計 ¥1,800 集金	～17:30
* 3) 11月7日(土) 8:00 体育館前集合	広島・宮島旅行 資料館入場料¥50+フェリー¥340+昼食代	～20:00
4) 11月18日(水) 12:40 西門集合	岡山南高校訪問 バス代 (¥200+¥160) × 2 = ¥720	～17:30
5) 12月2日(水) 12:40 会館ロビー集合	茶道(留学生会館の和室) 菓子代¥300集金	～16:00
☆) 11月28日(土) 29日(日) 12月12日(土) 13日(日) 19日(土) 20日(日) 26日(土) 27日(日)	ホームステイ(1泊2日または日帰り) ☆課外授業(自由参加) 終了後、礼状を出す。	
6) 1月13日(水) 12:40 C24教室集合	書道(C24教室) 「愛・希望・友情」などを毛筆で書く。	～15:00
* 7) 1月27日(水) 12:40 体育館前集合	赤磐市訪問 小学校訪問・郷土資料館見学	～17:00

* = 貸し切りバス

↑
終了時間 (±30分)